

日本における社会民主主義の可能性

## 社民の根っこ

篠田 徹 (早稲田大学社会科学部教授)

同僚に岡沢憲美がいる。いわずと知れた社民、それもスウェーデンものの泰斗だ。学生時代、領袖パルメに率いられたスウェーデン社民のまばゆいばかりの魅力に生身で触れ、以来インテレクチュアル・アクティビストとして、その日本への転回の可能性を、その巨躯で文字通り体を張って押し広げてきた。それから30年。おかげで今日、日本の社民的言語風景には、学者・研究者から市民活動家まで、スウェーデン・シンパの山並みが脈々と続いている。

けれども岡沢の著作に親しむとき、そこにはまた、語り口において後に続くものとある種の懸隔も感ぜずにはいられない。それをひとこと言えば、後輩が社民の成果を強調するのに対して、岡沢は社民の原点にこだわる。もし社民の成果が福祉に代表されるとするならば、では社民の原点とは何か。岡沢の数ある著作の言説を、無茶を承知で要約すれば、それは「開かれた個人主義」とでも言えようか。

## 「開かれた個人主義」

岡沢は大阪人らしく「コピーの名人」だ。なかでも「開け開け、もっと開け」は秀逸だ。もちろんパチンコ屋の開店コピーではない。日本の社会、いや日本人をもっとオープンにせよ、そこにこそ連帯の礎は始まるのというのが、彼の言わんとするところだ。

では、もしこれがここでいう「開かれた個人主義」のキャッチ・コピーだとすれば、それはいかなるメッセージなのか、それがどうして連帯の礎になるのか。ここでいう個人主義とは、一言で表せば、「人を人と思うこと」に他ならないだろう。したがって己のことを己自身で決めたいと思えば、それは他者として変わらぬと信じ、その己の意思を大切にせんとすれば、他者のそれをも尊重する。そしてこの他者に対する

想像力が、己の自己実現を可能にする。そしてこの相互依存性こそが、己を他者と連ならせる。

ではこの個人主義に、「開かれた」がつくとどうなるか。それはここでの他者、つまり「人」とみなされる対象を限りなく広げ、そこにいかなる区別立てもしないこと。すなわちユニバーサリズムこそが、ここで「開かれた」と強調する所以であろう。そしてこの人を人と思う空間、自己と他者の自己実現に不可欠な共有空間。これこそいま流行のワードで言えば「公共空間」であり、こうした共生の作風に親しむ者を、民主主義の知見に倣って「市民」というならば、この空間こそ「市民社会」に他ならない。

「男性」がいま以上に自己実現するために、そのパートナーたる「女性」にもその機会を同等にし、「健常者」がいま以上に自己選択・自己決定できるために、それが交わる「障害者」にもその権利を同等にし、「就業者」がいま以上に働き甲斐を感じるために、その仲間の「失業者」にもその時間と場所を分け合い、そして「国民」がいま以上に自分たちの社会に誇りが持てるように、それが構成する「人類」にもその意識を持ってもらおうと積極的に関わろうとする。岡沢が物語るスウェーデン社民が長い間押し進めてきた理念、目標、政策にはいずにも、この「開かれた個人主義」が深く宿っているように思えてしょうがない。

実はこの開かれた個人主義と似て非なるものがある。それはストイックなミーイズムとでも言えようか。ミーイズムはよく個人主義と言い換えられる。けれどもミーイズムには、いま述べた個人主義におけるような自己を自己たらしめるのに不可欠な他者はいない。そばに誰かいたとしても、それはあくまで己の損得勘定によってしか立ち現れてこない存在であり、実に身勝手な認識対象である。だからある者は仲間とされ、別の者は遠ざけられる。しかもその

関係はその時の風向きで、容易に変わってしまう。そう、ミーイズムは自分以外に対して、基本的に閉じている。やっかいなことに、こういうミーイズムはしばしばその本質とは逆に、わがままな振る舞いのように見えないこともある。自分のことは自分です。他人に迷惑はかけない。そう言えば聞こえはいい。けれどもそこにも結局、自分しか見えないミーイズムの世界が広がる。しかもこの場合、ストイックなだけに、本人は自分さえがんばればというその身勝手さが他者にもたらす罪悪に気がつかない。

思えば日本、とりわけ明治以降のわれわれは、このストイックなミーイズムをひた走ってきたのではなかったか。最近政治摩擦が激化する近隣諸国からはもちろん、経済停滞以降、欧米先進諸国からも同類とはみなされず、社会科学での比較研究の対象から次々とはずされ、まさに四面楚歌ともいえる現代日本のさびしい後ろ姿は、ミーイズムのメガ・シンボルであった100年以上に及ぶ「黄一点の脱亜入欧」と、そのもとで一心不乱に突き進んだストイックな戦争と経済成長のかなしい末路に見えてしょうがない。

マクロな国の姿は、ミクロな働く日常に投影されている。いわゆるガンバリズムはその典型であろう。ひとりで悩んで、ひとりでがんばって、ひとりで苦しんで、そしてひとりで何もかもしょって、最後にととう力尽きていく。どうしてそこまで我慢しなくちゃならないのか。どうして助けを借りようとしれないのか。どうして自分の代わりはいないのか。もちろんそこまで追い詰めたことに、責めを負うべき人や組織があるだろう。助けや代わりを求めようにも、どうにもならない周囲の切羽詰った状況というものもあったろう。でもそこには自分のほかに目がいかない閉じた己というものがなかったか。

## 「ひとりの10歩」から「10人の一歩」へ

とはいいうものの、ストイックなミーイズムは実は日本社会特有の性癖でもなければ、「黄一点の脱亜入欧」に変化の兆しがなかったわけでもない。例えば60年代初頭、ゴールデン・コンビ吉永小百合と浜田光夫を擁して大人気を博した映画「キューポラのある街」では、高校進学を前に窮状極まる家庭の長女として、ひとり頑張り続け、絶望の末に自暴自棄に陥るヒロイン小百合嬢に、「北」に一家して渡ることに

なった在日朝鮮人の同級生が、「一緒にアルバイトした時、とてもうれしかった」、なのに「どうしてわたしに相談してくれなかったの」「ひとりで悩んでるなんてあなたらしくない」と励まされる。そして、社会に出たって勉強はできるんだと諭された担任の先生が言うその意味を確かめようと、見学に行ったトランジスタ工場で、女性工員から「ひとりが10歩進むより、10人が一歩進むことの方が大切なよ」と啓示を受ける。

この映画で吉永は最初、職人気質で横暴な父親を「自己中心」と非難し、そんな「おとーちゃん」がいる家にはいつまでもいたくない、自分は進学して「自立」した人間になるんだと宣言する。でも実はふたりともストイックなミーイズムなのは違はなく、その後いろいろ痛い目にあってそれではやっていけないとわかった父は、毛嫌いしていた組合の助けを借りて再就職、娘は「自立」とは「仲間」がいてはじめて出来るものだと「開かれた個人主義」に目覚める。こういう労働文化は、しかしその後の高度成長とそこで労働運動が賃上げ・生活向上の右肩上がりの数字にかまけていく中で廃れていく。当時この労働運動の連帯文化に対するミーイズムの害毒に警鐘を鳴らしたのは、戦後の日本型社民の成長に民主的戦闘性を垣間見ている清水慎三だったが、彼の遠見は、ついで運動の当事者たちの耳には届かなかった。

無条件降伏で、ストイックなミーイズムの「ひとりの10歩」では、周辺地域の人々から信頼を得ることはできないという苦い教訓を学んだ日本は、その後どうしたら隣人とともに、「10人の一歩」を踏むことができるかと、皆があれこれ考えた。「キューポラのある街」は、開かれた個人主義に根ざした日本型社民形成の努力が、ようやくポピュラー・カルチャーとして定着しかかっていた何よりの証拠である。

## なつかしい光

大陸育ちで引き揚げ組の岡沢は、おそらくストイックなミーイズムの惨禍を身をもって体験し、新生日本の形成期を、この戦後の開かれた連帯文化の浮沈をともにしながら青年となったことであろう。若者の叛乱の限界を横目に、その破綻を予感しながら、ナホトカ号に乗り、シベリア鉄道に揺られて、ヨーロッパ放浪の果てに見た北の理想の輝きは、実は彼にとってなつかしい光であったかもしれない。